

Lecture3 長谷川真理子先生

「伝統的小規模社会における集団的葛藤」

早稲田大学で 2,3 回生物対応性と平和という講義をさせられていたことがありますのでその講義をもとにしたスライドを持ってきましたので少しお話したいと思います。

タイトルは私が先ほどちょっと申しましたようにもともと人類学出身なのですけれども、チンパンジーとか鹿とか羊とか色々動物の行動の事を研究して、で今やっとめぐりめぐって人類のことに興味が戻りまして人間の研究に回帰しているのですけれども、今日は動物の事を最初ほんの少しとそれからこのタイトルにある、人間が普通の巨大文明とか市民革命とか産業革命とかああいうのを経る前の、どちらかというと本来の人間の姿であった、長い事本来の姿であった伝統的な小規模社会において戦争とか集団間の葛藤というものがどういう風に起こり、どう解決されてきたかということのまとめ、そして最後に今話題になっております生物学的なバックグラウンドみたいなものを考えたら、何をどう考えたらよいかということ、今私が考えていることを話したいと思います。

先程戦争とバイオレンス一般の区別とかいうことがありましたけれども、確かに戦争っていうのは集団で行うということが特徴です。コレクティブアクションで、集団が他の集団に対して攻撃を行うことでありまして、個別のバイオレンスではありません。集団対集団であるということと、それが始まると集団のメンバーというのがこの集団とこの集団というように分かれまして、相手に対しては全てのメンバーに対してバイオレンスが行われます。そして傷つけたり殺したりすることを目的としています。この 3 つは動物の方でも言えるのですけれども、後の 2 つというのは動物には全てに見られるわけではなくて、チンパンジーなんかはあるのですけれども、どれだけの損害があったかということをよく記憶しております。スコアキーピングがあります。それからこちらのリスクも軽減しつつ、なるべく多大な影響、攻撃を与えたいというそういう計画・プランがあります。動物の中でそういう今言ったような事の、この 4 番と 5 番はさておき、この上の 3 つを満たしているようなことが見つかるかということと見つかっております。それは鳥ではアラビアチム鳥というのがよくそういう事をする、と。それから水生哺乳類の 2 種、イルカやアシカも集団的バイオレンスが見られています。あと食肉目で 6 種類こういうのがあって、集団対集団で本当に相手を殲滅するということがあります。すごく多いのが霊長類で、霊長類は 100、200 程いますけれども、そのうち 49 種にこういう集団対集団の殺戮的な行動が観察されています。そして全部の中で大体何が原因かというとはほとんどが食物資源をめぐる争い、またはメスをめぐる争いです。これは霊長類の集団でみられる闘争行動ですけれども、これはラングールで、あれはカイヨウサンチアゴのアカゲザルで、これは非常にはっきりとこっちの集団とむこうの集団が対決しているのがよくわかると思います。これはヒヒですが、別に今は喧嘩をしていません。特にそういう事で注目を上げているのがチンパンジーですね。チンパンジーはすごく人間に近いし、600 万年の分岐のところで、今現存している霊長類で人間と一番

近い。そして私は実際に 2 年半くらい野生チンパンジーの行動を研究していましたので、彼らの行動をつぶさに見て、実際に集団がある他の集団の個体を襲って殺すようなところも見たので非常に印象的でもあります。人間に近いということとそういう戦争のようなものがチンパンジーにもあるということで、逆にチンパンジーから類推して戦争というのは人間の本性の一部だと言っている人もいますので、特にチンパンジーというのは注目されています。チンパンジーはどういう事をするのかというと集団の内部の大人のオスというのが複数で連合関係を組んで、そして他の集団の同じような連合関係にあるオス同士を襲います。そしてそれが普通の 1 対 1 の攻撃ではなさそうだというのは、先程の 4 番目と 5 番目にありましたような、攻撃の計画があり、意図を隠して何かをしようというような思いが感じられるようなことを確かにやっております。時々パトロールのようなことをしますが、パトロールをしに行く時は相手集団の周辺部に沈黙で行きまして、全然声を出さないのですね。いつもはワホッ、ワホッ、ワホッてずうっと言っているのに全然鳴かずにいきます。そして本当に攻撃は殺意を意図していて、最終的にはメチャメチャに、バラバラにするくらいに殺します。それからパトロール進入攻撃は大体敵の数が少ない時に行くとか、何らかの計画性が、はっきりとは言えませんが、ずっと観察しているとそう感じます。それから数が段々少なくなっていった集団は一頭一頭と計画的に殺されていって、最終的に全滅されてその群れはなくなったという観察がいくつもあります。結局はどうなるかといいますがその全滅された集団の縄張りを勝ったほうが全部取ってしまって、メスも全部移ってくるということになります。これは私が撮ったマハラチンパンジーですけれども、チンパンジーはすごく、そういう意味で、私は 3 年近く研究して、本当に大嫌いでした。みんな霊長類の研究をしている人たちというのは対象にとっても入れ込んで大好きな人が多いのですけれども、イギリスのジェーン・グドール先生なんかとてもチンパンジー大好きだし、松沢先生も大好きなだけけれども、私は大嫌いです。そういう、この子供ではないのですけれども、これのすごく仲良しのメスの子供なんか全部食われてしまったところも見たので、そういうのを見るとやはり 600 万年というのは偉大な違いだと思ったりして、すごく複雑な気持ちであります。ですから、そういう計画性に基づく集団対集団の闘争はチンパンジーには確かにある。そしてそれは主にオスのアクティビティーだし、その成果は領土と女を獲得することになるというのが、確かにそれはあります。さてそれがチンパンジーでも、チンパンジーの話も面白いのですけれども、もうちょっと人間の方へ行きます。伝統的小規模社会というのは何故興味深いかということと色々な国民、国家、文明、技術の色々な文化的な装置っていうのがミニマムであり又は存在しないようなときに人間がどういう風に本来ビヘイビヤールが出てくるか、それが生態学的なところとどう関係するかということが生物学的な人間性ということを考えてときに非常に興味深い対象な訳ですね。生業形態としては狩猟採集とか牧畜とか粗放農耕とか色々な人たちがいますが、いわゆる技術文明みたいなこととはちょっと遠い、そういうところは持たないで立派な生活をしている人たち、と。そういう人たちは大体集団サイズが 50 人から 150 人位で普通は暮らしております。そ

の上のレベルにもっと大きなサイズがあるんですけども。内集団の帰属、自分の集団というのを皆はっきり分かっていて、その内集団への帰属は血縁とか婚姻を通じてのネットワークがあります。そういう内集団に対して自分の集団ではない外集団があり、その外集団は敵対関係もありますけれども、もちろんたくさん協力でネットワーク関係も持っていないとやっていけないので、ここには協力と敵対のコンフリクトがあります。もちろん内集団の内部にも葛藤と協力は存在しますけれども、今は戦争の話なので、内集団の結束で外集団に向かっていく時の事です。こういう伝統小規模社会はたいていヘッドマンというか、長(おき)という人たちはいるのですけれども、必ずしもヘッドが統括して命令しているわけではありません。みんな合議制があったり、それぞれの意見が集約されて全体の意思になったりしまして、特に聖人君子のようなそういう人は普通はいません。それから法律とか警察とか軍隊とかいう組織にはなっていないし、制度としても確立したものとか書いたものとかいうのではありません。ただ慣習的にどういうことをするかはみんな決まっています、みんな心得ているわけです。こういう民族資料の、70年代まで位に彼らの本来の暮らしの様子というのを積み重ねた資料というのは沢山色んなところにありまして、私はサーベイで調べたものをもとに話しますが、大体こういうところの人たちの記録が非常に沢山、詳しい記録があります。色んな人たちが色んな生業形態、色々な生態的に違う場所に暮らしていますが、そういう人たちがどういう暮らし方をして、何をどうして、誰と誰がどうなってということ非常に細かく研究したまとめです。こういう伝統的小規模社会に戦争っていうものがあるかというので、西洋では未だにこういう問題はセンシティブなところがあります。伝統的な考えのひとつはホプスのリヴァイヤサンのように、国家・権力・政治機構というのができないと、人間はどうしようもなく暴力的になっていって、国家があるからこそ平和がくるんだと。それは全ての人間が平等で要求が同じであれば必ず戦いが生じるからだ、というのがホプスの考えですね。ですからこういう考えでいくと、小規模社会は国家・権力・政治機構というのとはっきりない、だからものすごく争っているだろうという風に予測がたつだろうと。それに対してルソーの“高貴なる野蛮人”で代表されるように、そういう文明とか何やらがもたらした制約によって集団間バイオレンスが出てきたのだと。そうではなくて、そのような装置がまだない人たちの方が平和に暮らしているんだという様な考え方もあって、特に西洋ではこういう葛藤がありました。そして未だに小規模伝統社会というのが結構戦争のようなものがあるのだと言うと、それは西洋文明との接触によってねじまげられたんだという意見も必ず出てきて、このデータをどのように取るかということに関しても非常に論争は確かにあります。私が色々サーベイしたのはこのオッターバインという人のエイジュラフノとかロスとかヨルゲンセンとか、キーリーのウォービフォアアシビライゼーションという本が結構沢山あるんですけども、私もこういう研究を一時的にやっているわけではないので、色んなところをあたってみました。そうすると小規模伝統社会というので先程定義した様な集団が集団に対して、特に全員を相手にして何らかの葛藤を解決しようというような事が、それが戦闘である、バトルである時と、略奪・待ち伏せ・強奪のよう

な形をとる時とあるのですが、これを全部合わせてみると様々な記録の中で 90%、87%、87%という様にこういうのがあります。ですから伝統小規模社会はかなり戦争、集団間コンフリクトを暴力的に行っているというのがその通りなんだと思います。でもこれもその通りだと思いますという、これはしかし本来の姿ではなくて西洋文明との接触によって色々なことがねじ曲げられたからという考えがついてくるということはおいておいて、聴いてください。これはハーバードのフィルムスタディーセンターに載っている写真なんです、ニューギニアのダニの人たちはかなり高頻度で戦争をしますけれども、1930年代の写真です。それからヤヌマモの人たちの戦いの様子というのはナポレオン・サブロンの研究が非常に有名で、詳しいのがあります。では、小規模社会の戦争で、戦争で死ぬ殺人率というのは10万人あたりでどのくらいかというのを計算すると、私は今、現代日本の殺人の研究をしているので、現代日本の殺人というこれは戦争ではなくて普段の1対1の個体の葛藤による殺人の事ですが、今の日本人だと10万人あたり一人以下ですね、殺人で殺されるのは。現代のニューヨークは10万人あたり10人、かなり高いほうです。それに対してエスキモーとかフェゴークとかゲブシンの人たちというのは、かなり高い頻度に、計算するとなります。ですから、この人たちの人口が少ないから50万人あたりなんかで計算すると非常に高い率になるわけですね。出来事としてはスポットであっても、それは率にしたらこんなに沢山いる我々で同じ率で起こったらすごい事になるというのがこの数字です。それともう一方、殆ど戦争をしていない集団というのもありまして、伝統的小規模社会で暮らしながら民族的な記録を調べていっても殆ど戦闘とか殺人のない集団なんていうのも確かにあります。それは大抵、長らく国民国家法制度化におかれている人たち。ひとつはカラハリのクンサンの人たちは68年以前の国民国家法制度におかれる前にはかなりの頻度で戦争や殺人をしていたけれど、それ以後は1回も起こっていないという事も記録があります。あと地理的に非常に隔離されている集団ではなくて、それから人口密度が極めて低い、資源が潤沢にそれに比べるとあるところでは記録がずーっとないという集団も確かにあります。頻度がどのくらいにあるかという、先ほどのノッターバインとか色々な研究によると50の社会の66%はかなり間がなく戦争状態を続けているところなんです。90の社会の62%は1年に1度、70から90%は少なくとも5年に1度はそういう集団間戦闘というのを経験しています。それからネイティブアメリカンの平原インディアンたちの研究だと86%が1年に1度以上そういうことも起こっているということです。ダニ族、ニューギニアのダニの人たちは研究者が入っている期間の5ヶ月半に7回の戦闘と9回の襲撃があったとか、ヤヌマモは最後の15ヶ月で25回の襲撃と略奪があったという風に、やっているところはかなりやっています。これは戦争に参加する男性のパーセントなのですが、キーリーの本からとりました。この黒っぽいところが伝統的小規模社会で白いところが第二次世界大戦とか帝国ですね、古代エジプトとか。で、そうすると色々書いてありますが、第一次大戦、第二次大戦とかはすごい数の男性が参戦させられてますが、黒いところもかなり多いってことは、伝統小規模社会で一旦戦争状態というのになると、そこに動員される男の人って

うのはメールポピュレーションの 25%以上、30%以上という風に、かなり動員されるということになります。それで、死者・負傷者のパーセント、死者がこっちで負傷者がこっちの細かい方ですが、これも黒っぽい方が伝統小規模社会で白い方が現代または古代の文明・帝国なんですけれども、やはり黒いところがかなり長く出ているのがあるという事は、戦闘で死んでしまう・負傷するという割合も伝統的小規模社会でかなり高い。それから総人口に占める年間戦争死亡、総人口のうちの何パーセントが戦争によって年間死ぬかというのは、黒っぽいのが伝統的小規模社会で白いのが文明社会ですけれども、これを全て平均すると、文明のものだと第二次大戦とか、ここにアズテックの 15 世紀のが一個入ってますが、文明のだと平均すると 0.13%になるんですが、小規模伝統社会だと 0.55%と、かなり死んでいることになります。総死亡にしろ戦争死亡も男性の割合がかなり高いといえます。結論は国民国家と法律という文明を制度として平和をもとうとする、そういう組織になっていない小規模伝統文化社会というのは戦争を集団間のバトル・戦闘それから略奪・待ち伏せ・強奪・襲撃という戦争状態という認識のもとでの、A 対 B っていう戦争状態ということでの略奪・待ち伏せ・強奪・襲撃を入れるとかなり頻繁にあることがわかります。そういう頻度は、もしかしたらというか今までのデータをそのままとれば、現代の国家におけるよりも非常に多くあるということです。小規模伝統文化社会の戦争による死亡は集団構成員の死亡の多くを占めているし、現代の国家におけるよりも高いかもしれない。それが成果として何になるかっていうのは、食料とか家畜の強奪とか畑の破壊とか、縄張りの拡充とかそういうのが一番どこにでもあります。これ、ポリネシア、ニューギニア、アフリカと書いてあるけれどもこれだけじゃなくて、縄張りや資源のアクセスの拡張というのがこういう伝統文化社会の戦争の結果もたらされるものであって、これは全ての戦争、こういう記録のあるところの全てで結果何が起こったかという、資源へのアクセスの拡張が勝った方に来ていると。それと、もうひとつはカニバリズムとかトロフィーとするとか、ということは局所的にこういうところでは見られますけれども、それが成果としてどこにでもあるわけではなくて、一番には資源アクセスの拡張です。どれくらいテリトリーを増加というかそういうことがあったかという、これもキーリーの本ですが、25 年間その戦争の以前とその戦争の以後で何パーセントその集団の縄張り・テリトリーが増減があったかというので、これはパーセントチェンジのプラスの方ですね。そうすると、ヌアがマンディンカットの戦争で領土を逃したというのが一番多くて 60%増えています。(それからこことかこういうのが幾つかあって、)白いところが帝国とか 20 世紀なんですけれども、ローマ帝国、19 世紀アメリカ、1800 年から 100 年間のヨーロッパというのが変動が多いところですが、それよりも多いところもあるし、それよりも少ないところもありますが、随分戦争によって集団が確保している縄張りの拡張というのが起こっているということです。しかし、小規模伝統社会というのがどういう風に資源を求める争いをおこしているかということを個別に色々なものを読んでいきますと、小規模伝統社会というのは色んなネットワークを沢山持っています。例えば A という集団と B という集団があって、A という集団と B という集団が戦うということ

になっても、まず即そういうことが始まるわけではなくて、A という集団には C、D、B という集団には E、F という風に他の集団と色々密な関係を持った集団があって、しかもこれ同士も色々な関係があって、そして何が起こるかというとならかのコンフリクトが起こると色々相談したり、贈り物がこっちにいたり、その贈り物があっちにいたりして、すごくそのネットワークの中で色々なバランスが図られます。そしてそういうバランスを図りながら、何とかこれを回避することも考えるのだけれども、それがうまくいかなかった時にはこういうのが一致団結してこれとこれはこっちに加担し、むこうとむこうはあっちに加担するという様なことも起こります。ですから非常に伝統的小規模社会の色々な集団というのが孤立して争いを起こすわけではなくて、広い意味での大きなネットワークの中であってそのネットワークの間のパワーバランスとか贈り物の交換を通じたレシプロシティの関係とかそういう事が非常に細かく起こりながら、そのコンテキストで起こります。大抵きっかけは何かというと、個人の争いであることが多いのです。この中のひとりの男の人があっちの男の人に何かを取られたとか、女を取られたとか、豚を盗まれたとか、そういう個人的な資源をめぐる争いとか個人の殺人とかということがきっかけになることが多くて、それに対して姻戚関係とか血縁関係を通じた交渉があって、そしてそれでコンペンセートされたと思えば取まったりもするのですけれども、そういう殺人とか資源をめぐる争いの個人で始まったものがどんどん復讐をよんだり、復讐が過剰であったという反応がきたりということで大規模な戦闘に突入していきます。その解決をする時にもやはりこのネットワークが非常に大事です。その戦争の原因というのは至近的な要因というのは大抵は殺人に対する復讐であったりとか、それは個別の争いですが、それとか約束の不履行、資源の交換のアンバランス、それはきちんと彼らはスコアキープングをしているので、あの時に豚とか何とかをあげたのに前の時に返ってこなかったとか、そういう約束の不履行とか、特別に誰かと誰かの個人的な争いに端を発した殺人の復讐ということが直接の至近要因としてあげられます。でもそういう至近要因で何故大きく爆発するかっていう事の究極要因には、長年に渡る二つの集団間の資源をめぐる争いが裏にあることが殆どです。それは作物より、猟場、家畜、水田、...、女っていうのがあって、こういうのをめぐる争いがどこかでずっとくすぶったり、根にもたれているものがあって、それをいつも何とかして、色々なネットワークのネゴシエーションで抑えているんですけども、それがどっかに端を発すると殺人とか約束の不履行が出てくると、非常に大きな、感情的なものになり、突入するということになります。ではこういう彼らが終結するときにはどうゆう風に終結しているかということ、それも色々な例をずうっと読んでいくと、双方の損害が大体程度が同じくらいになったら、どっちかが休戦を申し込むことを始めますね。それには、これは非常に大事だと思うのですが、なんらかの公正感というのが必ず働いて、先ほど言いましたスコアキープングをずっとしている訳だから、こっちがこの位やっておこうもこの位やって、こっちはこれやられてあれやられて、という事で大体集団の中での話し合いとか村長が何かを言い出すとかいう事によって、双方の損害の程度が同じ位になったときに休戦が申し込まれるというパターン

になります。それも顔が立たないとか面子の問題もあるので、直接的に言うことは少なく、第三者のネットワークの集団を介して色々なお話がやってくることが多いです。そうすると贈り物とか女性の交換によってはりめぐらされている普段からある同盟関係っていうのが非常に大事で、そこを通して公正感をもとに話し合いへいって、どっちも続けたくないのを止めましょうということになる。小規模社会というのは多集団との様々な同盟関係っていうのを細かく持っていて、それをいちいち記憶していることによって様々な交渉のオプションが用意されています。それで収まらないときにはずっといってしまうのですけれども、戦争ととどめる、止めるという機構としては必ずネットワークの同盟関係の交渉というオプションが様々なあるということが一番大事なようです。そうすると小規模伝統社会でも確かに戦争はあるし、そしてその損害というのはかなり大きいようです。それから小規模伝統社会での戦争の究極要因は資源をめぐる争いというのがどっかにずっとある時が多いのですけれども、実際の戦闘が始まるかどうかということは直接的な個人の復讐とか殺人とか贈り物の不履行とかそういうことがきっかけをつくる、火をつけることになります。結婚や贈り物の交換を通じて多くの集団と同盟関係をつくっていて、葛藤を和らげる選択肢が幾つも用意されていて、それを駆使する才能が、為政者のような人はあまりいない訳ですけれども、みんなの集団的な意思決定というのがこの選択肢をどのようにうまく活用して損害をおさえていくかという事の技が問われていく。あとは、後期旧石器、新石器とかこれもありかあるみたいで、これは3万4千年とか1万年とか千年とか色んな所の記録を見ると、大量殺人や大量殺戮というのはかなりの証拠があるみたいですね。こういうことの解釈は難しいし、実際どの様な事が起こったのかということは遺跡で骨をみるだけでは中々分からないわけですが、女も子供も含めての虐殺というようなものは、決して殆どなかったというわけではないように見えます、この石器時代のものを見ても色々あって。それで、最後になんですが、こうゆう事をまとめると、結局戦争というものが現代の国民国家が国家対国家でやっているという事だけじゃなくて、伝統的に人間が持ってきた小規模な生業形態に基づく社会というのも結構集団間闘争をやってきたということになります。そうしたらそれはバイオロジカルに組み込まれているという様な議論になるのではないかと。で、私はそういう事ではないのではと思うのですが、勿論そんな単純に何かの遺伝子があるから何かなんてそんな事は勿論どんな行動に対してもない訳ですけれども、でも私は進化生物学をやっているし、行動生態学をやっていますので、どういうレベルでどういう事が働くとこういう事になるのかという事をもっと細かく、色々なレベルで見えないといけないと思って、ではそれをどう切ったらいいかと。これはいくつかの論点なのですからけれども、かなりのものを色々見てみると、人間というのは群淘汰が働く可能性がかなりあるのではないかと思います。グループセレクションというのは普通は働かない、動物の行動の進化の中で集団のベネフィットのために個体が犠牲にされるようなことというのは、普通はおこらない。ジーンセレクションかインディビジュアルセレクションで、グループセレクションは起こりにくいというのはその通りなのですが、最近マルチレベルセレクションの理論で色々

群淘汰と個体淘汰と遺伝子淘汰とが逆方向に働いたりすることも有りうるという事が色々言われておりますが、議論の多いところですが、人間はマルチレベルセレクションが働いて群淘汰も働く可能性があるのではないかと私は思っております。と言うのは、集団淘汰的ところが働きそうな生き物というのは蜂とかシロアリとかハダカデブネズミとか、ひとつの巣の中とかひとつの生息ユニットっていうのが非常に強固に隔離されていて、中々そこから個体が勝手に出て行くことは出来ないような、そういう生態学的制約のある動物でおこっていますよね。人間というのは文化があり言葉があり、シンボルがあり、帰属意識があるので、ひょっとすると個人が勝手に出て行ってよその集団に移住するということがそんなに簡単にはいかないかもしれない。そうするとこの帰属が離れた、内集団を離れた個人の自由がそれほどないとすると、内集団に帰属していることが非常に重要であると集団レベルでの集団間葛藤がおこって、集団のベネフィットのために優先されることがありうると思います。で、それがあかないか、マルチセレクションは議論が多いところですが、伝統的小規模社会での戦争のあり方をずっと読んでいくと、グループセレクションが働いてもおかしくない気が今はしています。それでもマルチレベルなので、必ず葛藤がありますよね。その集団全体としてのベネフィットのために何かをするということとその中の構成員ひとりひとりがやったらいいということにはコンフリクトが、葛藤がおこるので、集団全体としてみたときに、この戦闘行動をしたらいいのかいけないのかと、それとそこに参加しているひとりひとりがその戦闘行動をすることによっていいのか悪いのかは、必ずしも利益に一致はないと思います。利益が対立することも大いにあると思います。その辺のマルチセレクションのあり方を考えると集団全体としての利益の追求と各個人の利益の追求に不当が生じたときに何が起きているかと考えたときにもっと細かく見ていくべきだと思っています。それから人間のバイオレンスに関する研究の中で大事なものは社会心理学だと思います。その社会心理学は今までも内集団と外集団の区別のこと、そして人間が内集団びいきの心理が非常に強く働くことは多くの研究で明らかにしてきましたので、この戦争という場面における色々なバイオレンスというのは単なるバイオレンスというのではなくて、内集団と外集団との区別と内集団びいきに絡んだ攻撃性、というところが非常に大事だと思います。これがどういう時にどういう内集団結束の心理が出来るのか、どういう時に外集団排除の非常に強い心理が働くのか、これは攻撃性と共感性の事で、人間というのが他者に共感性があるのが極めて人間の特徴だと思います。それは二重のレベルがあって、ひとつはtheoryofmindという心の理論で他者が何を考えているか、他者の意図や欲求がどこにあるかということ人間は自動的に理解することができる、視線とか動作によって他者の意図や欲求を知ることができる、これはtheoryofmindというモジュールが頭の中にあって、その事に特化した脳の働きかたがあるとか色々なことが言われていますが、認識のレベルで他者が何をしているか、何を欲しているか、何を意図しているかという事を人間は理解する事ができる。その認知のレベルだけではなくて、プラスして人間は他者がどういう感情状態にあるかということ自分の感情状態とパラレルにして理解することができます。

る。だから楽しそうにしている人には楽しそうに思えば、自分も楽しくなって、一緒に楽しんであげることができるし、悲しそうにしていたり、痛そうにしていたら、自分も同じ状態なら悲しい、痛いということがわかるから、一緒に悲しんであげる感情、empathy が自動的に働く、そっちもあるので、普通は認知的に他者の意図や欲求を理解すると同時に他者の感情状態、同情状態も人間は共有することができますね。その共感性というのは多分私はチンパンジーが大嫌いだった理由のひとつは、チンパンジーがこの共感性がないのだと、ないと言ってしまうと菅原さんが怒るかもしれないのだけれども、かなり低いのだと思います。認知レベルでの認識は彼らもかなりあるかもしれないけれど感情の共有という意味での共感性というのが人間の特徴だと思います。その共感性があるから、普通人間というのは他者に対して酷い事をするというのは中々できないはずです。でも攻撃性も共感性も双方共に普通の相手に対してはニュートラルで、別に特別に攻撃性がないわけでもなく、共感性が特別にないわけでもあるわけでもなくて、関係ない人は関係ない、ただの人なのですが、けれどもそこに何らかのスイッチが入ると、とても共感性を持つ人という風を感じる時と、共感性を切ってしまいたくなるような相手に分かれるというようなことができます。特別にケアしたい相手とケアしてやりたくない相手というのに、この共感性の上下にスイッチを入れることができる。それプラス攻撃性も、特に攻撃してやりたいというやつと攻撃はしたくないというのがあって、攻撃性と共感性というのは普通ベースラインはニュートラルとして、どういう特別な感情を持つかということで、上下のセットができますね。ここが内集団と外集団と内集団びいきと、そして集団全体の利益という事に応じて、このセットがどこに入るかという事が具体的な戦闘とかそういう時での兵隊の心理状態とか、虐殺に行くか行かないかとか伝統小規模社会でもどうしてこの人があの人に槍を突くことができるのかというのはその時のこの辺のセッティングで決まっているんだと思います。この辺の、共感性を感じることができるというのは人間の非常に大きな特徴で、大抵の場合には共感性が自動的に働くのだけれど、それを何故、故意に共感性を切ったり、レベルをマイナスに下げたりすることができるのか、この心理メカニズムは誰も研究していないと思います。その辺が大事なところじゃないかと。それから攻撃性も、必ず攻撃性があるとかないとかいう話ではなくて、どういう時に攻撃性がオンになるのかということの内集団外集団とくっつけて研究したらいいんだと思うのですけれども。あともうひとつは公正感と仲直り、リコンシリエーションの事があって、この二つは非常に深く動物、特に霊長類に根ざしてあるようですね。最近の色々な霊長類の研究でも、同じような努力に対して同じような報酬が得られるという事ならば納得するけれども、よそが多く貰っているというようなことに関して、非常に腹立たしく思うっていうことは猿レベルでもあるらしい。そうすると、あのキャプチャーモンキーの実験というのはコントロールショナルでもあるのですが、とにかく公正感というのが必ずしも理性的に考えた何かでなくて、自動的なスコアキーピングというのは霊長類あたりはかなりやっているかもしれない。このキャプチャーの研究というのはまだコントロールショナルなんですけれども、尾巻き猿が研究者に石を一個渡すと、きゅうりがひと欠け

貰えるという実験を成立させるのですね。そうすると尾巻き猿は喜んで石を研究者に渡すときゅうりをひと欠けもらって喜んでいたと。そしてある日、スルスルと扉が開いて、横に別の尾巻き猿がいて、その尾巻き猿を見ると何と石をひとつ渡すとぶどうを貰っているのですね。そうしたらきゅうりを渡していたのがすごく怒って、その次に研究者がほら、石をおよこして言ったときに、石をあげなかったりとか石をあげてきゅうりを貰ったら、そのきゅうりを投げ返したとかっていう事をして、よそが同じ石でぶどうの様な倍以上の価値のものをもっているのが気に入らんというような事をしたっていう実験があって、それは幾つか実験を他の影響ではないというようなコントロールを示す実験をされているのですが、そういう非常にプリミティブなレベルでも物との対価みたいなものを、努力と対価ということに対するバランス感覚というのはあるかもしれない。そういうのが公正感で、公正感は伝統的小規模社会でも色々な中ででてきたように、戦争を始めるきっかけも不公正だと思ったら行くし、そして止めるときもこれで双方トントンだと思うと止めにかかるっていう風に、公正感をひとつの、はじまりも終わりも決めるひとつの目安として持っているのかもしれない。それから仲直り、リコンシリエーションというのは、これも霊長類にとっても広く見られて、喧嘩をした後というのは必ず仲直り行動をしないとイケないような、そういう行動をよく見せるんですね。それで気まづくなるのを修復するようなタイプの、毛づくろいをちょっとするとか何かするということとかがあって、これは子供でも、小さい子供でも、すごくこの仲直り行動というのは頻繁にやります。こんなようなことは生物的に我々の脳の働きのなかに組み込まれているのかもしれない。で、こういうところとこういうのもっと上のレベルでの決断というのとどう個人的な感情とが結びつくのか、それが決して個人的には集団全体レベルでの利益と合致するとも限らないわけですから、それがどうゆう風に暴走したり、変な方へ行ったり、または強調されたりってというような事がおこるかというメカニズムも調べていけば、具体的に戦闘状態におかれている個人の行動ってのが深く、もっとわかってくるのではと思います。その意味では人間行動生態学とか進化心理学とかこういうセッティングにおかれたときの各個人がどういう風に攻撃性や共感性をオンにしたりオフにしたりするかという事は明らかにできると思います、やっていけば。ただしですね、大きな意味での戦争というのがどう起こるかという、それは今いったように個人がそのセッティングにおかれたときとは別問題に、大きくありますよね。これは本当にポリティカルサイエンスでありまして、これは、例えば、アメリカの広瀬さんの本から取ったのですけれども、アメリカは国家歳出にしめる軍事費の割合というのが本当に 25%以上なんですよね、いつも。そうして 90%にいったこともあるような、こういう凄い国で、だからべらぼうなお金を戦争にいつでも使っているという大国なわけです。しかも、巨大軍需産業というのが、これは軍需産業が再編成された 80 年代以後の主なものですけれども、ボーイング、ロッキード・マーティン、ジェネラル・ダイナミクス、レイセオン、エンジン大連合、ノースロップ・グラマン、ランド・コーポレーションにナショナル・ライフル・アソシエーションと NASA など大量の武器を作っております。そしてその CEO とか社長

とか全部こっちの人たちです。ですからアメリカっていうのは国家歳出の 25%以上を常に軍事費に使っていて、そして大量の軍需産業というのがあり、これが国家意思決定をする人たちによって経営されているから、戦争を作っているのですよね。ですから色んな所で彼らは需要をまかなう為に武器を売っているし、何故色んなところでテロが起こるかといったら、ここがテロに売っているから。それであれだけ沢山の武器が出回って色んなところが戦闘状態になるというのがあるから、一旦始まった戦闘という中で個人がどういう事をするかは私たちがやっている進化心理学で何かが明らかになるんでしょうけれども、じゃあそもそも軍縮であるとか、戦争というものを現代の国家においてやめるというのをどうするかといったら、こういうコングロマリットみたいなものの存在を考えずに何かを言っても始まらないし、生物学的とかそういうことでは全然収まらないので、これはもう全く別の話として大いに別のところが分析しないといけないのだと思います。

どうもありがとうございました。

池村先生:何か質問がございましたら...

柴崎先生:最初の方にも、先生のお話の中にも(切)あの、戦争というのは相手を傷つけ、そのために傷つけ殺すことを目的としていると書いてあるのですけれども、ずうっと先生のお話を聞いていると、実は目的っていうのは相手の縄張りを自分のところに持ってきちゃうというか、相手のもっている資源のアクセス権を略奪する又は獲得するのが、それが目的であって、...

長谷川先生:はい、大きな目標はそうです。

柴崎先生:で、相手を傷つけ殺すことが目的ではないんじゃないでしょうか？

長谷川先生:えーっとね、大目的は縄張りを取ることとかなのですけれども、ここで言っているのはそうやっていけば必ず相手は出てきますよね。その時に傷つけたり殺したりすることを目的とする、だから出てきた、反撃にあったら、それはただ動けなくようにするだけじゃなくって、反撃にあった時には傷つけ殺すということが短い意味での目標とされているという意味です。

柴崎先生:僕はなにが気になったかというのと、相手を傷つけ殺すことを...しているという風に思うことと、そうではなくて、本当の先生がおっしゃ大目標の...領土が資源や縄張りの獲得とかいうことになるんでしょうけれども、この事をきちんとわけないと、何を自分が研究しているのか、何を考えようとしているのかってことがすごく不明確になってしまう...

長谷川先生:それはですね、戦争自体がそれを明確化しないことがあります。というのは、先程私が出した色々な伝統小規模社会で結局のところ縄張りアクセスが増えたというのは結局のところ結果なのですね。本当に、具体的に、現実起こった結果、だけど彼らが戦争をするときの、自分の戦闘の正当化として喋る時にはそれは縄張りを大きくするためだとは言わないことはいっぱいあります。だから集団全体が集団的バイオレンスに関わる時の大義名分に縄張りを取ることは言わないことがいっぱいあります。そしてそれは相手にお兄さんを殺された事の復讐なんだとか、約束不履行に対する復讐なんだというような、ある特定の個人を殺したりすることを目的のように言って、みんなでそれはそうだ、そうだと行って行くこともあるのですね。ですから、具体的に本当にその縄張り獲得とか資源アクセスが目的かどうかというところは意識されている場合とされていない場合とがあって、隠された目的はそうであっても表明されている目的はそうではなかったりします。だからそこは私も、私は動物行動をやっているんで結果として測定されるものは何かということ確かにアクセスが拡大したってというのは測定できますから、その時のその結果はいえるのだけれども、じゃあ本人たちはそのためにやっていたかと意識していたかということ意識していない時もいっぱいあります。

でも多くの場合、戦闘の時には出てきたら殺せという風に言われているし、そういうつもりでやっています。

柴崎先生:はい。

高畑先生:今のことに関連して2つ質問をさせていただきますけれども、ひとつはですね、小規模社会におけるグループ殺生の可能性を指摘されましたよね、普通グループ殺生というとこれは私、何も相手を抹殺することをとらなくたって、要するに沢山相対的に残した方が、戦争に勝つわけですからね、今の質問に関係してですね、それは結果的に残るかもしれないのだけれどもそれが目的ではないということもありうるわけですね。自然では大体そうだと思うのですが、では小規模社会で本当にグループ殺生が...可能性があるかどうかという問題ですが、これはご存知の通り、先生の専門だから。キンシップの目処がたたなければ、そんなものは起こらない訳ですから、じゃあ小規模社会はどうかといえば、それはやっぱり...そのレベルでグループ間の闘争とってはなんです、コンフリクトが起こって、グループ全体を守ることが...、当然出てくると思うのですが、...、そのことは先生はどのようにお考えなのですか？

長谷川先生:先生は特にマルチセレクションを考えられなくても、キンセレクションで大丈夫というお考えですか？

高畑先生:キンセクションレベルで見ているんだけど。

長谷川先生:はい、それは大いにありますけれども。

高畑先生:その事と関係して、ナポレオン・シャルロンの話で、今日の話、あるいはこれからもそうかもしれませんが、戦争というのは絶対あるとみなさんお考えになって、これは自然でも解決しなくてはいけない問題だという認識を頭からもっておられるかもしれないけれども、例えば小規模社会における戦争ですね、その結果起こった、例えば女性の略奪というような問題を、小規模集団として考えてみると、これは新しい...が出てくるということになっているんですね。で、...ディプレッションを防ぐ効果があるので、...にいつてられると思うんですけども、この違った集団から新しい女性を連れてくるのが本当に戦争をやっているんだという目的で...。それはまあ、...それがなければ、集団自体が絶滅してしまうということもあるわけですから、イベントや交流...、その結果、何故戦争という結果をとらなくてはならないかという、ちょっと別の問題なのですが、...、もっと交流ができないのかという問題もちょっとあると思うのですけれども。その、戦争という形をとっているのですけれども、本当に悪い側面ばかりではないところが実は小規模社会にはあるのではないかと。で、それをやってきたばかりに逆に...集落が...統一性を保ちながら、潰れないで、ここにきたのではないかと。

長谷川先生:そうですね。それは私は生物現象を理解するというレベルでは、本当にそういうことはあったし、戦争で色々な略奪やら何やらをやったからこそ、あるサイズの、ポピュレーションのものが存続し得たのだと、その生物現象の説明としては大いにそういうことはあると思います。じゃ、ただその次に戦争っていうことを悪とするか、しょうがないとするかという価値判断となったときには生物現象の理解とは別に、我々の選択になりますから、そうすると今後我々がどんな社会をつくっていくか、というときに先程の知識は必要だけれども、その知識が戦争を正当化するわけではないと思っています。ナプシャグノンのような集団が、ヤマヌモのような集団が、戦争がなかったら、多分潰れていただろうと。そして、それは説明としてその通り。で、じゃあ、今の我々の価値判断として、戦争して女の人が略奪されていくようなことを仕方のないこととか、積極的にいいこととかどうか、そしてそれをそのまま letitflow みたいにするか、は我々の価値判断であって、今までの生命現象の説明としてあるのはよいけれど、しかし我々は今後はそういう社会でないことにしようというならば、そういう価値判断を取るならば、そうではない方策をこんどはあみ出さなくてはならなくて、そこは説明としてのものと今後どうそれを価値的にとっていくかという事はやっぱり別でないかと思っています。

湯川先生:先生の話聞いて、やっぱり驚いたと思うのは、戦争の形態が色々あるわけ、例えば部族間の戦争から国家間の戦争、宗教間の戦争、その中で勿論部族間の戦争というのはある意味で科学的というか、ある程度遺伝学とかそういうものでの解釈が付けられるよう

なところもある。だけれども最後の方ですね、アメリカのような...もある、そういうようなものとはまるで違った、新しい人間としての特殊な形態になっていくということがですね、こういうような研究の中ではあまりその、遺伝子とかそういうようなレベルの研究は学者でもできるからってどんどん進んでいたとしても、もっともその現況というか、その非常に恐ろしい戦争についてはあまりにこういうようなアナリシスだけではできないようなところがあるような気がします。それについて、どれ位我々が戦争と平和の研究から言えるかというのは、僕は先生のお話になって言うわけではないのだけれども、ある程度...非常に大きな問題点があるってというのは聞きました。宗教を...

長谷川先生:そうですね。で、宗教も結局、内集団と外集団ということが根底にあるのではないかと思います。だから、個人個人がどのように戦争するか、個人個人が戦闘状態になったときに何をするかという事は、この社会心理とか進化心理学的研究でかなりのところまでいくと思うのです。で、本当に聞いた話ですが、米軍とか何かはそういうような研究を利用して兵士達を訓練しているから、わざと共感性をシャットオフできるようなやり方の訓練の仕方とか、プログラムがいっぱいあるんだそうです。だから、逆手にとれば、そっちも出来るわけで。だけどその事と本当に最後に出したような、ああいう経済的政治的な構造的としての戦争を生み出されるしくみというのは全く別次元の話なので、こっちも同じようにやらないと、絶対になりませんよね。ただ我々がバイオロジーで出来るのはセッティングの中での個人がどのように動くかということにすぎないといえすぎないと思います。

質問:先生のお話の一番最初のところで、今日お話していただいた内容が生物多様性と平和という講義の一部だったのと思うのですが、今ずうっとお話を聞いていて、生物多様性と今のお話とがどういう風に関係がつくのかな、というのが興味があるのですけれども、もしよろしかったら、少しだけその辺を教えていただければと思うのですけれども。

長谷川先生:これは政治経済学部の開発経済の西川先生と、それから学長の白井さんが広島市長と長崎市長と沖縄県知事を巻き込んだ平和学っていう講座で、生物多様性と平和というのをしゃべってくれと言われて、生物多様性と平和なんてどうするんだというのをすごく悩んだ挙句に、そのひとつがこの戦争の人類学、もうひとつが資源利用の人類学で、こういうタイプの伝統小規模社会の人たちが自分たちの周りの環境の資源を利用するにあたって、本当に生物多様性の保全みたいなものを考えてやってきたかどうかというのをまとめました。で、結論は、考えてはやっていない。それだけれどもいろんな意味で彼らはうまく、生態系の中の一員としての分をわきまえたやり方をしていた。けれども彼らは認識的な発想として conservation を考えていたわけではないというのが2回目、で、3回目は戦争状態になるとどれ位本当に生物多様性が破壊されるかということで、ベトナム戦争の事とか、イラン・イラクでの失地のこととか、そういうのをやって、で、本当に地球環境問題を考えよ

うとしたら国際平和が先がないと、環境問題なんていう先送りの問題はすぐふっ飛ぶから、だから今地球環境問題というのは非常に重要だけれども、この話が本当に取り上げられるようになったのはソ連が崩壊した以後であって、国際平和の舞台で目前の一番重要な冷戦構造がある間はどんなに地球環境、地球環境と言われてもこれが国際舞台に乗ることはなかった。だから、本当に地球環境問題が今後も国際イシューとして出てくるには、まずは国際平和がないと無理なんだというのが3回目で、苦し紛れに生物多様性と平和という3回の授業をこなしております。

質問:戦争がある時にその中の個人の個性というのはどうなるのでしょうか?戦争をやろうとする時にはやめようよ、やめようよと言う人もきっといるだろうし、

長谷川先生:伝統小規模社会ですか?

質問:ええ、ええ。それは結構どこでもやめようという力とやろうという力のバランスがあって、やっぱりこう、行っちゃうときと引き止るときとがあるということですか。長谷川先生:あります。特に伝統小規模社会で色んな特定の個人と特定の個人との確執がまずは基本になりますでしょう。その時にその親類縁者とか、奥さんとかがいて、その人たちは必ずしも血縁度も一定じゃないし、同じじゃないし、非血縁も入っているし、こちらの敵と、敵の男の人の縁者だったりする人もいるわけですよ。ですから、すごくその間でやれ一、やれ一っていう人たちとやっぱりこっちの敵とも義理があってやめたいという人たちもいて、そこでごちゃごちゃごちゃごちゃ話し合いがあるのです。そしてそれぞれの人たちがそれぞれの伝手を通して色々話し合いのチャンスを持ちかけてくる。結局はでも、大勢として反感が非常に高まった時にはみんなやってしまうと。ですから、必ずしも全員が一致はしていないですね。

質問:あとですね、もうひとつ。戦争の状況とですね、たとえば野球の乱闘とかですね、何かアナロジーとして捕らえることができるかということですね。野球でもね、乱闘は何か必ず全員出て行かないといけないらしいんですね。それが、100%動員になるわけですよ。その中でもやっぱりすごく戦う人と後ろの方で嫌々ながら付き合っている人と、いるわけですよ。ま、それとアナロジーとして出来るものですね。

長谷川先生:社会心理のレベルでアナロジーっていえば、やっぱり集団帰属意識と集団間対立という構図を捕らえているかどうか、ということです。何かその、私も殺人の研究をしています、大抵個人的なものは個人的な1対1のコンフリクトだからそこに、あの、暴走族のとかってそうですね。自分が直接危害を受けたわけでもないのに、仲間の誰かがやられたということが全員共通の損害と認識される、で、それで自分に対する侮辱と同じ侮辱だと思うっていうのは、内集団の帰属意識というのが集団全体のコストを個人のコストのよう

を感じる。で、それが働くと、そのメカニズムが働くと、ああいう形になる。それは戦争でもそうだし、サッカーのあれもそうかもしれません。